

岡谷市教職員研修会 (2024. 7. 23)

松木 健一先生のご講演の概要 (文責: 学びの創生・連携支援室)

岡谷をめぐる教育の課題あれこれ

1 若い先生自信を持って！教師は専門職だ！ 教師の専門性を捉え直すと、やるべきことが見えてくる

□ 専門職とは何か (スライド3)

* 教師は専門職 = 生涯学び続ける人のこと = 省察的实践者 (Reflective Practitioner)

□ 省察的实践とは “Reflection” 「反省」と「省察」の違い (スライド4)

* 「反省」… 受動的、「楽しかったです」終わりのための儀式、教師主導的な授業

* 「省察」… 実践の主体的な再構成、スパイラルな構成の授業、学習者主体の授業

□ 専門職とは何か (スライド5～6)

* 専門職とは経験から学ぶ人のこと* 実践の傾聴 教師は、他者と対話をしながら、自らの実践を絶えず新しく作り直す人

□ 自らの過去を新しくすること 実践内容を語り傾聴することの意味

* 附属病院でのカウンセリング「傾聴」の経験から (スライド7・8)

・ あるお母さんの話を傾聴 「子どもがかわいくない」⇒「どう関わったらよいか分からない」

* 人は事実を選びつなぐことで自分の物語をつくる (スライド9)・ 省察や対話を通して、過去の事実を選び直し、異なった事実のつなぎ方ができるようになる

・ 人は事実を語りながら自分を創る生き物 ⇒ 専門職は「範例」に鍛え上げる人 (熟練化)

* ハイダーとジンメルの実験 (スライド10)

・ 人には、認識の仕方として、物語風に因果関係を読み取ってしまう仕組みが組み込まれている

* 他者との対話を通して、新たな過去の事実を生み出し、新しい物語を再構築 (スライド11)

□ 専門職とは何か (スライド12・13)

* 教師とは、過去をたえず新しく作りかえる人* 自己の経験の再構築を通して普遍的原理に近づこうとする 範例科学の徒 長期の実践記録

□ 教師は一人では育たない 学び合うコミュニティ・チーム学校 (スライド14)

* 職員室に子どもの語り合う文化のない学校の教師は育たない

□ 教師の専門性を高めるための語りと傾聴に必要なこと (スライド15・16)

* 異なる経験を持った異質者 (他校の先生、指導主事、大学教員等) の必要性・ 異質者が参加することで、振り返りが深まる

* 長期にわたる実践の記録

・ 授業実践をつなげて語るには物語のテーマが必要 ⇒ 教育的価値観、子ども観が問われる

* 校内研修を組織する (スライド17・18)

・ 異質者 (縦軸) と長期実践記録 (横軸) を視点に、校内研修を組織 (右肩上がりになるよう)

□ まとめ 教師という専門職の特徴

1 教師とは、生涯学び続ける人である2 教師は、省察的实践者である3 教師とは、経験から学ぶ人のことである4 教師とは、絶えず過去を新しく作り変える人のことである 5 教師は一人では育たない6 実践を語り合う文化のない学校では、教師は育たない7 実践を書かない教師は、優れた教師にはなれない8 教師が育つためには、時々異質者を交えた対話が必要である

2 学習者主体の学びに挑戦しよう！ 学習者主体の授業必要性和そのプロセス

□ 学習者主体の学びが必要となった歴史的、社会的背景

* 現代: VUCA … 日本では、AI やIT による産業構造の転換、急速な人口減少 (スライド19)

* 人口の推移に伴う人間の発達 (スライド20～23)

・ 人口増加時代では、平均寿命が延びようと延びまいと人生の3分の1は子ども

・ 社会が豊か ⇒ 身体的発達【加速】精神的発達【減速】⇒ 精神的に不安定な子ども時代長期化・ 発達の減速現象と実年齢のギャップにより様々な問題 「勤勉性」を獲得しないまま中学へ* 急激な人口減少により、発達の減速現象による発達課題と少子化による発達課題を同時に解決しなければならない事態に 子どもも早い時期から社会人としての責任 (スライド24)

□ 時代の変化に伴う子どもの学びの変化 (スライド25・26)

人口増加時代	人口減少時代
・大人になってから役立つ知識と技術を学校で訓練し、社会へ ・基礎・基本と応用力という構造	・子どもの時から大人の学び方（PBL）を実施 ・探究する能力もITやAIスキルも基礎・基本 ・普遍的な知の構造に向け、知識・技能を整備する活動が協働探究活動とセットになって必要

□ 子どもたちの協働探究活動が成立するには 主体的・対話的で深い学びの成立過程（スライド 27～）

子どもが不思議に気付く	教えられる（教授）
・自分で確かめてみよう、それまでに身についた知識や技術を駆使して取り組む ・主体的に考え行動する力につながる ・汎用性のある、生きて働く知識・技能となる ＊現代社会は、<u>主体的に協働探究し、知を創造する学習様式への転換</u>が求められている（<u>プリコラージュ</u>）	・教えられたり説明されたりして理解する ・受動的な学習になりやすい ・効率よくたくさんの知識を学ぶ ・正解のない課題に取り組もうとしなくなる ・教えてもらうのを待つようになる ・習得した知識・技能は異なる実際の状況では機能しにくい

□ 子どもの探究活動がどうやって生まれてくるのか（スライド 29～）

- ① 何もわからないところから出発する探究学習は、まずはプリコラージュから始めることが肝心
 - ・ Learning-by-doing や Trial and error のサイクルを繰り返しながら思考の仕方自体を順次繰り上げていこうとする学習の様式 「まかないめし」
 - ・ 自分の頭で考え、自分の持つ技能を駆使して行動しようとする
 - ・ 自分で解決しようとする意識を持つことが主体的な学習活動の始まりとなる
 - ・ 発意・構想・構築・遂行・省察の過程を繰り返すことで前進的に発展
 - ・ 協働探究を生み出すファシリテーターとしての教師の役割
- ② プリコラージュ段階からの繰り上がり（スライド 33）
 - ・ 優れた実践・実践者・作品・成果、新たな観客との出会いにより、自分の知識・技能の中に収まっていた活動が、自分の行っている活動と比較して分析的、論理的に把握できるように
- ③ 環境構築段階 探究活動の背後にある仕組みに気づく（スライド 34）
 - ・ 探究活動を支えるエコシステムの改善まで関心が拡大し、取り組みがなされる
- ④ 終焉段階（スライド 35）
 - ・ 探究活動の目標が明確になると、課題の改善や効率化のための PDCA サイクル化して終焉

3 新しい仕組みの学校を岡谷に創ろう！ 子どもと教師が学ぶ少子化時代の学校の姿

□ 少子化と緊迫財政及び学び合う時代における新しい学校の3つの視点（スライド 36～）

〔視点1〕 学校の設備や校舎 学習机が黒板に向かって整然と並べられた教室 ⇒ 協働探究の架け橋となる環境（話し合いのできる丸机、いつでも情報を検索できるタブレット）

〔視点2〕 日常生活がデジタルでつながる学校の組織づくり（スライド 37・38・39・40）

- ＊ 行政区内の学校を一つの学園とする発想により、行政区内の全体を見回して教員を配置
- ＊ 根本から考えたい「学校種の壁」 小1プロブレム・中1ギャップ（スライド）
- ＊ 子どもは「学校種の真ん中」で大きく発達
 - ・ 4歳前後 … 身体を通して外界認識 ⇒ 身体経験を言語で再構成することで他者と共有
 - ・ 3、4年生 … 体験と言語によって、経験していない事象を経験の延長として理解する
 - ・ 中学生 … 様々な事象の認識を自己のアイデンティティ形成と絡めて再構成
- ＊ 先生の関わり 保育士 自己の体験したことを言葉で表現できるように思いを言葉に直して子どもに返す 子どもに「寄り添う」支援
教師 経験の世界から抜け出せるように問う 論理的思考を促す支援
- ＊ 5、6歳児は同じ発達段階にあるが、保育士と教師では子どもに対する関わりが違う
 - ・ 発達がゆっくりのために対応できない子ども 発達について幼保小で議論する必要性 小中間の発達についても同じことが言える（「勤勉性」を身につける）

〔視点3〕 子どもだけでなく、教師が学ぶ組織を作る（スライド 42）

- ＊ 学校種を越えた研究会の設置
〔幼保⇒小〕就学前の子どもの学びの表現・「領域単位」で研究会を設置し、子どもの学びを整理
〔小⇒中〕教科担任制の小学校高学年（中学年）では、中学と「教科」を考えて一緒に動く

□ 新たなことに挑戦する岡谷市に、学校単位を越えた取り組みをぜひ進めてほしい